メリケントキンソウ撲滅対策マニュアル

鹿児島県環境林務部　自然保護課

令和2年4月1日
鹿児島県外来動植物対策推進員
窪　健一氏 提供

ステップ1：メリケントキンソウ（外来植物）成長のサイクル

◇メリケントキンソウとは？

・原産地：南アメリカ
・外来生物法位置付・・・無し
・科名：キク科（越年1年草）
・繁殖力が旺盛な危険な植物。
・草丈は3～20㎝程度。
・侵入地：民家の庭、駐車場、公園、空地、農地、路肩、校庭など。

成長

冬

成長　茎は、枝分かれし、地表に覆いかぶさるように成長していく。

発芽

秋

発芽　秋の9月頃から芽生えがみられる。

春

開花　最初に株の中心部に花をつけ果実となる。頭花の直径は7～10mm程度。

開花

株の中心部に黄色の花が咲く。

開花～結実　株の中心から分岐枝部へ順次花をつけ果実となる。花は外輪よりトゲが形成される。

分枝した枝に黄色の花がつく。花弁の中に刺のついた種子を準備する。

枯死

夏

枯死　メリケントキンソウは、夏になるとすべて枯死する。翌年、秋以降は、拡散された種子から発芽し、成長する。

結実

結実　分岐枝部に緑色の果実（トゲ）をつける。緑色した果実の径は5～7mm程度である。

枝に緑色の果実、約25～40本程のトゲがつく。

結実した果実は、熟すと茶褐色のトゲ（成熟種子）になり危険な時期である。

種子成熟

トゲ（種子）は、2～3mm程度で先端部は硬く、鋭く尖っている。各トゲには種子がひとつずつ入る。

トゲ（種子）は、熟すとバラバラになりやすく、カブトガニのような形をしている。

ステップ2：似た種との見分け方

シマトキンソウ
・南アメリカ原産
・先端の葉が幅広く分裂している
・枝別れは無い、毛が少ない
・果実は株の中心に地面へ接しつく
・柔いトゲがある

メリケントキンソウ
・先端の葉が細長く明るい
・枝別れし毛が多い
・果実は株の中心～成長し分岐した枝に多量につく

カラクサナズナ
・南アメリカ、ユーラシア原産
・茎や葉には悪臭がある
・茎は寝て横に広がる
・薄緑色や紫の小さな花が4～8月に開花

ステップ3：メリケントキンソウが引き起こす問題

①人に鋭いトゲが刺さって怪我をさせる恐れがある。
②靴の裏やタイヤに刺さり、 繁殖地を拡大している。
③農作業に影響がでる恐れがある。
④日本固有の在来植物の生育場所を奪ってしまう。

①トゲが肌に刺さり怪我

②靴の裏に刺さり分布拡大

③耕作地に侵入

④芝生の生育を阻害

ステップ4：だから駆除対策が必要

①長い年月をかけて地域になじんできた公園や校庭の楽しい遊び場や農地、駐車場などの生活環境を守り、子供たちの世代に引き継ぐために行います。

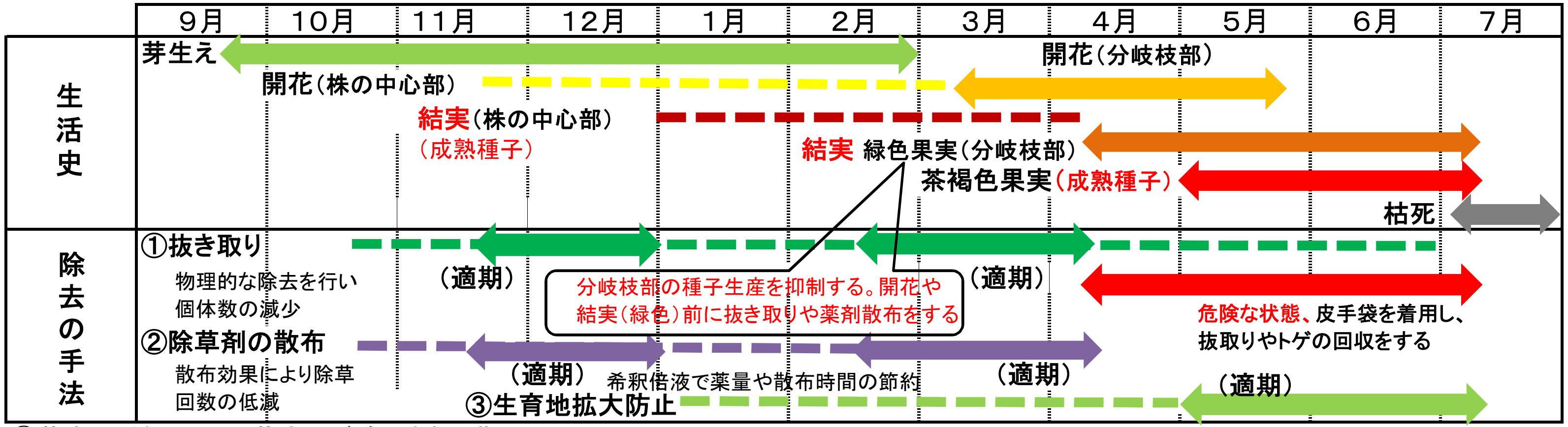
②メリケントキンソウは、繁殖力が強く、一度はびこると除去は、防御よりもはるかに困難です。気付かないうちに繁殖し、駆除が追いつかなくなることが多いです。**（市の駆除対策実施植物）**

③予防策は、一般的に、定着後にとる措置に比べて、はるかに費用対効果が高く、環境的にも望ましいです。そのため、まずはメリケントキンソウを「**入れない、捨てない、拡げない**」の外来種被害予防三原則に則って対策することです。

④駆除対策手法を使用し、定期的な駆除作業と効果の確認をしながら撲滅を目指します。**（早期発見と駆除）**

◇メリケントキンソウの生活史と駆除対策手法の適期

本図は、これまでの生態観察、駆除例から、生活史及び対策の適期について、おおよその目安の時期を記入したものです。生活史は土壌、生育地で異なります。



①芽生え：種子からの芽生えが確認される期間。
②開花　：株の中心部～分岐枝部まで開花が続く期間。
③結実　：株の中心部や分岐枝部に果実が結実し、トゲのある成熟種子が飛散する危険な時期。
④抜取り：手での抜き取りや工具を使って直接除去し、回収したメリケントキンソウは一般ゴミ袋で搬出。
⑤除草剤：農薬登録を受けた茎葉吸収移行型のグリホサート系の薬剤を使用方法に基づき使用した場合は、安全で効果的と考えられる。（芝生の中は選択性のもの）
⑥生育地拡大防止：靴底やタイヤのトゲ（種子）落としと、飛散した種子を吸着ロールや吸引除去し個体数を広げない対策を講じる。
⑦注意：ビーバーによる刈り取りは種子を拡散させる上、ちぎれた茎の節から芽をだして成長するので望ましくない。